

# 近代朝鮮半島における木炭事情

——日本資料を中心に——

呉 征 涛

## Charcoal Production in Korean Peninsula under Japanese Colonial Rule

—Based on Japanese Materials—

WU Zhengtao

Even with the changes of usage of energy resources in early modern times, such as relatively new fuels like coal, oil and gas, charcoal continued to remain the main fuel used by ordinary people in Japan from the late 19th century to the early 20th century. In Korean Peninsula, which was a colony of Japan from that time, Koreans did not use charcoal as fuel for everyday life much. But as Japanese moved to the Korean Peninsula and the Government-General encouraged the charcoal industry and production, charcoal was produced in large quantities and exported abroad, especially to Japan proper. Korean Peninsula became a production site that provided a large quantity of charcoal to Japan and played an important role in ensuring Japan's fuel supply until the end of the World War II.

This article aims to clarify the history of development and historical significance of the charcoal industry in Korean Peninsula by focusing on the Japanese materials.

キーワード：近代，朝鮮産木炭，朝鮮総督府，海外輸出

### はじめに

木炭は世界各民族の共通する熱源の一つであるが、特に木炭国ともいえる日本では古くから重要な燃料として取り扱われ、非常に大切な物資であった。近代以降、とくに明治日本の木炭生産技術の改良により、日本の木炭生産が発達し、明治中期（1882-1897年）においては香港、イギリス領印度、北米まで輸出していた<sup>1)</sup>。明治後期、とくに1903（明治36）年に日本木炭の輸出先が「全體ノ七分ハ支那ニ向ヒ、又其二分ハ韓國ニ供給セラレ、以上ヲ除キタル殘餘ヲ以テ、露領亞細亞、香港、比律賓等ニ向ッテ輸出

---

1) 日本鉄道省運輸局編『木炭ニ関スル経済調査』（大正14年刊行『明治後期産業発達史資料』所収，811巻），龍溪書舎，2008年，96頁。

セラレタルモノナル」と、1908（明治41）年の日本の調査記録に見られるように、主に中国と朝鮮半島に移動した<sup>2)</sup>。また、同報告では、当時の朝鮮半島における木炭の使用状況に関して、

韓人ハ一般ニ木炭ヲ使用スルノ習慣ヲ有セザルガ故ニ其需要ノ程度ハ極メテ低ク、殆ンド需要ノ大半ハ在留本邦人ノ占ムル所ナリト云フモ不可ナシ。而シテ是等ノ需要ニ對シテハ該地ニ在ル韓國木炭ヲ以テ供給セラレ、殆ンド不足ヲ見ルコトナキガ如シ。<sup>3)</sup>

とあるように、朝鮮半島の人々は一般に木炭を使用する習慣がなく、朝鮮半島で木炭を使用する人は主に同地に在留する日本人であった。また、これらの朝鮮に在住する日本人が同地で生産されたものを使用したこともあった。

大正期になって日本木炭の輸出先が漸次に変化し、中国をはじめ、東北中国、露領亜細亜などの地域に輸出されていた<sup>4)</sup>。大正期に海外に輸出された日本産木炭の生産地は主に日本本土を中心とした地域であっただけではなく、当時日本が支配していた朝鮮、樺太、台湾などの地域でも木炭の生産が行われ、そのうちとくに朝鮮産木炭の生産は迅速な発展を遂げた。1920-1922年における朝鮮産木炭の輸移出数量に関して、1925年（大正14年）の日本鉄道省運輸局の「木炭ニ関スル経済調査」には次のように見られる。

其ノ増加ノ勢ハ極メテ迅速ニシテ、大正九年ノ三十一萬貫ニ對シ十年ハ約五十二萬貫ヲ増シ、十一年ハ更ニ之ヨリ約五十六萬貫ヲ増加シ、九年ニ比スレバ約百八萬貫即チ約三十五割ノ増産ヲ示セリ。其ノ仕向地ノ主ナルモノハ内地及支那ニシテ、十一年ニ於ケル内地ヘノ發送數量ハ百十一萬貫即チ沖繩縣、大阪府、香川縣等ノ生産量ニ匹敵シ、支那ヘノ輸出货量亦急激ナル勢ヲ以テ増加シ、十一年ノ數量二十八萬貫ニシテ、九年ヨリ十一萬貫即チ約六割ヲ増加ス。是等ノ趨勢ヨリ觀レバ朝鮮木炭ノ生産モ同様著シキ發展ヲナシツ、アルヲ想像スルニ難カラズ。<sup>5)</sup>

1920（大正9）年から1922（大正11）年にかけて朝鮮産木炭は輸移出数量が大幅に伸張し、大きな発展を遂げた。

これまで木炭に関する研究として日本全国燃料会館が編集した『日本木炭史』がある<sup>6)</sup>。日本木炭の歴史の変遷、とくに木炭の生産、販売、輸送、価格などに関する資料を網羅している。そして、池部祐吉の「内地に於ける木炭の需給関係に就て」は、朝鮮半島における木炭の移出入量がとくに注目に値する

2) 東亜同文会編『支那経済全書』（明治41年刊行、第十輯）、東亜同文会、1908年、317頁を参照。なお、本稿で引用している一部の原資料には句読点やタイトル等は付いていないが、見やすくするために添付した。また、見やすくするために、漢数字をアラビア数字とした。

3) 前掲、『支那経済全書』、1908年、320頁。

4) 前掲、『木炭ニ関スル経済調査』（大正14年刊行『明治後期産業発達史資料』所収、811巻）、2008年、96-98頁。

5) 同上、67-68頁。

6) 『日本木炭史』、全国燃料会館、1960年、572頁。

と強調しているが、日本木炭の海外輸出事情に関して主に日本を中心とする成果である<sup>7)</sup>。また、韓国側の研究としては、張正男の「古代炭窯研究」と金鎬詳の『韓國의木炭窯研究』とがあるが、いずれも木炭窯を中心に述べている<sup>8)</sup>。しかし、近代朝鮮半島における木炭の使用と流通、とくにエネルギー生産構造における朝鮮産木炭の位置づけに注目した先行研究は管見の限り見られない。

そこで、本稿は『通商彙纂』、『静岡県勸業彙報』、『木炭ニ関スル経済調査』などの日本の政府刊行物を根拠に、近代、とくに20世紀初頭の朝鮮半島における木炭状況について考察するものである。

## 一、大韓帝国時代の木炭事情

1897（明治31）年8月に朝鮮国王であった高宗李熙は新元号である「光武」を施行し、10月に皇帝となり大韓帝国が成立した。1905（明治39）年、第二次日韓協約に基づいて大韓帝国の外交権を掌握した日本はソウル（京城）に韓国統監府を設立した。1907（明治40）年には、林業課、翌年には山林局、またソウル、大邱、平壤、木浦、鏡城などの五ヶ所に林業事務所を設置し、植民地的な造林政策を骨格とした林政を行い始めた<sup>9)</sup>。林産物の重要な一つである木炭はこのような林政体制下において注目されていた。

この時期においてさまざまな調査が行われ、その調査報告に朝鮮半島の人々の燃料に関して調査された各港近郊の「木炭需要状況」という調査資料が多く残されている<sup>10)</sup>。とくに、大韓帝国時代の1904（明治37）年、1908（明治41）年における調査をもとに1900年代の朝鮮半島における木炭の生産と消費状況について述べるものである。

### （一）1904年の『通商彙纂』から見た朝鮮各港の木炭事情

1903（明治36）年に朝鮮半島は日本木炭の主な輸出先であった。これら朝鮮半島に輸出された木炭の消費者はほとんど当時の朝鮮半島に居住している日本人であった。一方、当時の朝鮮において木炭生産があったが、それを消費する人は朝鮮に住む日本人が多かった。朝鮮人は木炭を使用する習慣が少なかった。

この時期における朝鮮半島の木炭状況に関して、日本外務省が編纂した領事報告をまとめたものとし

- 
- 7) 池部祐吉は「植民地に対する移出入の関係は、朝鮮が主要なものである。元来朝鮮の森林は開けた部分は非常荒れて居るが面積が相当豊富なのであるから、製炭技術の進歩に連れて内地に対して移出超過になって来、その量は漸次増加の傾向がある。（中略）内地より移出するのは朝鮮が最も多いのであるけれども結局入超になって居る事は今述べた通りで、尚台湾と関東州へ多少出て行く、要するに移出入では朝鮮が幾分注目に値するだけで其の他は問題にする程の量ではない」<sup>7)</sup>と、朝鮮産木炭の地位を強調している。（池部祐吉「内地に於ける木炭の需給関係に就て」『燃料協会誌』、第148号、燃料協会出張所、昭和10年1月、75頁）
- 8) 張正男「古代炭窯研究」『湖西考古學』（第6・7合集）、湖西考古学会、2002年、217-258頁。金鎬詳著『韓國의木炭窯研究』（博士学位請求論文）、大邱가톨릭대학교、2003年。
- 9) 萩野敏雄著『朝鮮・満洲・台湾林業発達史論』（1965年刊行（『アジア学叢書 143』所収）、大空社、2005年、44頁。
- 10) 日本政府の外務省通商局では明治18年（1885）以降、ソウル・仁川・釜山・元山等を中心として経済貿易関係の調査報告を行っている。『領事報告資料収録目録』、雄松堂フィルム出版、1983年を参照。

て『通商彙纂』が挙げられる。とくに、1904（明治37）年の『通商彙纂』に、朝鮮の重要港口である釜山、仁川、元山、木浦、ソウルなどの地方の木炭事情が次のように詳しく記録されている。次に、『通商彙纂』を通じて1904（明治37）年の朝鮮の各重要港口における木炭状況を考察してみたい。

### （1）釜山

1904（明治37）年に日本の在釜山帝国領事館の報告によれば、

〔木炭需要ノ情况〕當釜山港ニ輸入セル本邦木炭ノ重ナル産地ハ佐須奈（對州）、仁田（對州）、石見、豊後等ニシテ、其輸入額ノ割合ハ對州炭十分ノ九、石見豊後炭十分ノ一位ニテ、白炭、黒炭ノ兩種類中需要ノ多キハ白炭ニシテ、各地炭トモ六貫目乃至八貫目入ト稱スル兩様アリ、品質ハ石見豊後ノ方對州炭ニ優レルヲ以テ、其價格ニ至ッテモ少シク上位ヲ占ム。而シテ當港ヘ輸入セラル、ニハ、各産地ヨリ主トシテ和船ニ積込ミ、當地炭問屋ヘ送り來リ。（中略）〔一ヶ年需要數量〕當港ニ於ケル本品ノ需要額ハ年々歳々居住人ノ増加ト共ニ昂進シ來リ、昨三十六年ニ於ケル需要數量ヲ揚クレハ、約五萬二千六百八十二俵ニテ、本年ハ居留人口一萬以上ニ達シヨレハ層一層増額ヲ見ルナラント倡ス。<sup>11)</sup>

とあるように、釜山で使用された日本産木炭は主に日本の石見（島根県西部）、豊後（大分県中南部）、対馬などの地域から輸入された白炭と黒炭であった<sup>12)</sup>。その中に、白炭は黒炭より需要が多かった。木炭の生産地については、石見・豊後産の木炭は対馬産より品質が優れていたため、価格も対馬産より上位を占めていた。それと、釜山に輸入される日本産木炭は主に和船に積み込まれ、直接に運送されてきた。また、釜山に於ける木炭の需要量は毎年当地の日本人居留民が増加するとともに漸次に上昇する見込であった。

### （2）仁川

1904（明治37）年に日本の在仁川帝国領事館の報告によれば、

〔一、需要狀況、需要額及其供給地〕當地方ニ在リテ本品ヲ需要スル者ハ殆ント全部本邦人ニシテ、韓人ノ室暖ハ重ニ柴薪枯草等ニ依リテ保タル。本品ハ韓國産ニ在リテハ京畿道ノ長湍、黃海道ノ助

11) 日本外務省通商局編「釜山地方木炭需要状況」『通商彙纂』（明治37年10月14日発行、第63号）、日本外務省通商局、1904年、3-4頁。

12) 『広辞苑』によれば、「白炭」とは「木炭の一種。石窯でセ氏九〇〇度〜一四〇〇度の高熱で焼き、これを窯の外にかき出し、消粉と称する土・炭・炭粉をまぜたものをかぶせて火を消すので表面が灰白色を帯びる。質が密で堅い。原材は樗・栗など。備長と違って、ウバメガシを焼いたものが最良。かたずみ」というものである。「黒炭」については、「木炭の一種。土竈で焼き、かまのなかで消すので、黒色で質が軟らかい。原料はクヌギを焼いた佐倉炭が最良で、ナラがこれに次ぐ。どがま。やわらか炭。くろめ」と解釈されている。『広辞苑』（新村出編、第六版）、岩波書店、2008年、1432頁と841頁を参照。

浦及長淵地方ヨリ、本邦産ニ在リテハ對馬、日向其他中國地方ヨリ供給セリ。其本邦ヨリ供給セラルモノ、類ハ極メテ尠ナク、昨三十六年中ノ輸入高ヲ税關年表ニ徴スルニ僅々四萬千〇二十五斤（本邦ヨリ直輸入及當國開港場ヲ經テ輸入セルモノ）ニ過キササル有様ニテ、消費高ノ九分方ハ韓國産ヲ以テ需要ヲ充タシ居ル姿ナリ。是レ一ハ韓産ノ火持良キト、一ハ賣價ノ其割合ニ高カラサルニアリ、殊ニ韓産中根炭ト俗唱スルモノハ讀ンテ字ノ如ク、木根ヲ以テ燒製シタルモノナレハ、外觀宜シカラサレトモ、火持ニ至リテハ一層本邦産ノ上位ニアリ。<sup>13)</sup>

とあり、仁川における木炭を需要とした者はほとんど当地に在住した日本人であり、朝鮮の人は木炭を使用せず主に薪や枯れ草などを使って暖を採っていた。当地の木炭は朝鮮国内の京畿道の長湍、黄海道の助浦及び長淵地方から移入した他、日本の対馬、日向（宮崎県）、また中国地方（岡山・広島・山口・島根・鳥取の五県が占める地域）から輸入したものがあつた。ただし、当地で消費された木炭の約九割は朝鮮産であり、1903（明治36）年日本から輸入したものは僅か41,025斤（約6,564貫）しかなかった<sup>14)</sup>。朝鮮産木炭は当地の市場を占めたのはその火持ちが良く且つ価格が低廉であつたからであるとされている。とくに、朝鮮では「根炭」と呼ばれたものは木の根で焼成したものであり、外觀が悪いのに対して火持ちが日本産より優れていたという。しかし、根炭の存在は朝鮮半島の人々は木炭を製造し、使用していたことを示している。

### （3）元山

1904（明治37）年に日本の在元山帝国領事館の報告によれば、

〔一、木炭需要ノ情况〕當地ニ於テ本品ノ主タル需要者ハ本邦人ナレトモ、元來當地方ハ原料ニ乏シカラサルヲ以テ、其製造ハ韓人ノ專業ニ係リ、馬背又ハ人背ニ依リ、毎日居留地内ヲ賣歩クノ慣習ナリ。而シテ其品質ハ白燒、黒燒ノ二種ニシテ、本邦産ニ比スレハ余程劣等ナルカ如シ。〔一、需要額〕前項ノ如ク韓人ノ專業ニシテ、統計ノ徴スヘキモノナク故ニ、之ヲ知ルニ由シナキモ、在留本邦人戸數約三百、人口約二千、頗ル互寒ノ地ナルヲ以テ、其消費額ハ決シテ尠シトセス。然ルニ近來本邦人家屋ニモ韓人風ノ温突又ハ暖爐ノ設備ヲナスモノ多シ爲メニ、本品ノ需要上多少ノ影響ナキニアラサルモ、居留地全體ノ燃消價額ハ一ヶ年大約五六千圓ト假定セハ大差ナルヘシ。〔一、供給地〕當地ヲ距ル五六里德源、文川、安邊地方トス。<sup>15)</sup>

とあるように、元山では木炭を使用した人はほとんど日本人であつた。当地では木炭を製造する原料が

13) 日本外務省通商局編「仁川地方木炭需要状況」『通商彙纂』（明治37年10月1日発行、第63号）、日本外務省通商局、1904年、4-6頁。

14) 1貫=6.25斤によって換算した。本稿での「貫」と「斤」との換算は全てこの基準を参考にした。小泉袈裟勝『単位の起源事典』、東京書籍株式会社、1985年5月、193-194頁を参照。

15) 日本外務省通商局編「元山地方木炭需要状況」『通商彙纂』（明治37年9月21日発行、第64号）、日本外務省通商局、1904年、1頁。



不足していたが、白焼と黒焼との2種類があり、日本産より品質が劣っていた。当地は寒冷な地域であるため、木炭消費量の見通しが良いとはいえ、当地在住の日本人でも近年朝鮮風のオンドル（温突）や暖炉を使用し始めたため、木炭の使用を多少抑制していた。また、木炭生産地は元山と5-6里（約19.4-23.3km）離れた徳源、文川、安辺地方であった<sup>16)</sup>。

#### （4）木浦

1904（明治37）年に日本の在木浦帝国領事館の報告によれば、

一、當港ニ於ケル木炭ニ硬軟ノ二種アリ、硬ハ樫、櫛、檜其他ノ雜木ヲ用ヒ、軟炭ハ松ナリ。一、硬炭ノ需要ハ本邦在留民カ炊事及室内暖爐ニ用ユルノ外、他ニ需要ヲ發見スル能ハス。鍛冶職業者ハ多く、石炭ヲ用ヒ稀ニ要スルハ少許ノ軟炭ニシテ、韓人ノ需要スルハ軟炭ナリ。而シテ當港ハ冬季温暖ナルカ故ニ、消費高モ少額ニシテ、一ヶ年大約五萬貫乃至六萬貫ナリトス。一、木炭ノ重ナル産地ハ莞島及附近島嶼海南郡等ニシテ、羅州附近ニモ少額ノ産出アリ。濟州島ハ樹林ニ富ミ、最良ノ木炭ヲ産スト雖モ、輸送上不便ノ爲メ、當港ニ來ルモノナシ。而シテ全體ノ産出額ニ付テハ、數字ヲ以テ竝ニ表示スル能ハサレトモ、當港ノ需要ヲ充タシ、尚ホ群山、釜山等ニ多額ノ輸送ヲナスヲ見レハ、優ニ拾萬貫以上ヲ超過スルヲ疑ハス。<sup>17)</sup>

とあり、木浦では木炭は樫、櫛、檜、他の雑木を用いて焼成した硬炭と、松を用いた軟炭との2種類とに分けられている。硬炭はほとんど当地に在住した日本人が炊事および室内の採暖に使用していた。軟炭は主に鍛冶職業者の作業に用いられた<sup>18)</sup>。また、木炭の生産地は主として莞島及び附近の海南郡、羅州であった。

#### （5）ソウル

1904（明治37）年に日本の在ソウル帝国領事館の報告によれば、

〔一、需要ノ情況〕京城及ヒ其他當管内ニ於ケル木炭需用額ハ全ク之ガ調査ノ途ナキヲ以テ、其ノ概算スラ推測スルニ由ナシト雖モ、之ヲ本邦ニ比スルニ各戸ノ需用高ハ確カニ少ナキヲ知ル。其ノ情況左ノ如シ。

- 一、韓人ハ一般ニ暖ヲ取ルニ火鉢ヲ用ヒス。
- 二、韓人ハ炊事ニ木炭ヲ用ユルコト本邦人ヨリモ少ナシ。
- 三、韓人ハ概シテ湯又ハ茶ヲ飲マス。

16) 1里は約3.927kmである。二村隆夫監修『丸善単位の辞典』、丸善株式会社、2002年、368頁を参照。

17) 日本外務省通商局編「木浦地方木炭需要状況」『通商彙纂』（明治37年9月14日発行、第63号）、日本外務省通商局、1904年、6頁。

18) 硬炭は白炭、軟炭は黒炭のことである。

詳シク言ヘハ第一ノ情况ハ家屋ノ構造ヨリ來レルモノニシテ、韓人ノ家屋ハ都テ床下ニ火氣ヲ通シテ、室内ヲ温ムルノ構造ナレハ、殊更ニ火鉢ヲ用ヒテ暖ヲ取ルノ必要ナキノミナラス、本邦人ノ如ク來客ニ對シ煙草盆或ハ火鉢ナド供スルコトナシ。第二ノ情况ハ各戸ノ經濟ニ基ツクモノニシテ、木炭ヲ以テ炊事ヲ爲スヨリモ、室内ヲ温ムルノ火ヲ利用スルノ利益ナルト、普通ニ副食物ノ主タルモノハ漬物ナルヲ以テ、炊事ノタメ燃料ヲ要スルコト本邦人ヨリモ少ナシ。第三ノ情况ハ其ノ由來未タ詳カナラサレトモ、韓人ハ古來湯ヲ醫スルニ一般ニ冷水ヲ用ユルノ風習ナリ、因此觀之韓人ノ木炭ニ對スル需用ハ本邦人ニ比シ遙ニ尠ナルヲ知ルベシ。〔二、供給ノ情况〕當管内ニ於ケル木炭製造地ハ漢江沿岸地タル江原道ノ春川、狼川、加平等ヲ主トシ、之ニ次クハ忠清北道ノ清風、忠州等ニシテ、其ノ需用地ハ重ニ京城ナリ。而シテ之カ製造ノ有様ハ該地ニ於ケル農夫ノ餘暇ヲ以テ、各自木材ヲ採伐シ、個々ニ二三ノ燒竈ヲ築キ、僅々糊口ノ資ヲ得ルヲ以テ、満足シ居ルニ過キス。<sup>19)</sup>

とあるように、朝鮮人は木炭の使用において日本人と違う所が三つある。まずは、朝鮮人はオンドル（温突）という家屋の構造を使用し、暖を採るのみならず、來客に対して、煙草盆（茶道用具）あるいは火鉢（日本の一般的採暖の道具）を使用する習慣がない。次に、木炭で料理するよりも室内を温める火を利用するのは首位とされ、しかも朝鮮の食文化には漬物が多く、炊事のため木炭を使用することは日本より少ない。最後に、朝鮮では古来より喉の渴きをいやすために主に冷水を用いる習慣があり、お湯をあまり飲まない。以上の三点は朝鮮人の木炭利用が日本人より少ない主要な理由であるとされる。また、ソウルに供給する木炭の生産地は、江原道の春川、狼川、加平等の地域を主とし、それに次ぎ忠清北道の清風、忠州であった。これらの木炭を製造したのは生計の一助として炭焼きを行った農民たちであった。

## （二）1908年の『静岡県勸業彙報』から見た朝鮮各港の木炭事情

20世紀初頭、とくに1908（明治41）年に、朝鮮半島では木炭を利用するのはほとんど朝鮮に居住する日本人であった。しかし、朝鮮に居住する日本人が使用する木炭は朝鮮に輸入した日本産木炭だけではなく、朝鮮産木炭もあった。さらに、朝鮮産木炭だけで木炭への需要が満たされ、不足が見られないことがあった<sup>20)</sup>。そこで、1908（明治41）年の静岡県内務部商工課が日本海外における木炭状況について調査したものを蒐集し編纂した第3回『静岡県勸業彙報』から、釜山、仁川、大邱、元山、木浦、ソウルなどの朝鮮各港木炭事情について考察してみたい。

### （1）釜山

1908（明治41）年の釜山における木炭状況に関しては、

19) 日本外務省通商局編纂「京城地方木炭需要状況」『通商彙纂』（明治37年11月4日発行、第68号）、日本外務省通商局、1904年、4-5頁。

20) 『支那經濟全書』の「韓人ハ一般ニ木炭ヲ使用スルノ習慣ヲ有セザルガ故ニ其需要ノ程度ハ極メテ低ク、殆ンド需要ノ大半ハ在留本邦人ノ占ムル所ナリト云フモ不可ナシ。而シテ是等ノ需要ニ對シテハ該地ニ在ル韓国木炭ヲ以テ供給セラレ、殆ンド不足ヲ見ルコトナキガ如シ」を参照した。（前掲、『支那經濟全書』、1908年、320頁）

〔一、木炭需要の有無〕木炭八年中日本人必要ノ品ニシテ、就中十月ヨリ翌年四月迄ヲ需要ノ最盛季トス。韓人間ニハ本品ノ需用日本人ノ如ク多カラス、随テ韓人間ニハ日本産木炭ノ賣行ナシ。〔二、木炭ノ供給地及輸入高〕四五年前迄ハ在留邦人ノ多カラサル爲、日本ヨリ輸入多カラサリシモ、日露戦争前ヨリ邦人ノ渡韓著シク増加セル爲メ、日本炭ノ輸入随テ増加シ、當港ニ於テ八年々四万乃至五万俵ノ輸入ヲ見、本年ハ十一月迄ニ既ニ四万俵ヲ輸入シ尚ホ目下盛ニ輸入ヲ爲シツ、アリ、供給生産地ハ當地輸入ノ九分ハ對馬ニシテ、肥後、日向、石見地方ヨリモ輸入セリ。〔三、需要品ノ種類、用途、俵装、價格〕種類ハ堅炭（普通半白ト稱スルモノ）ヲ主トシ、用途ハ本邦ニ於ケルト異ルコトナシ。<sup>21)</sup>

とあるように、釜山に住む日本人は10月から翌年4月まで木炭を最も需要とした。朝鮮人は日本人ほど木炭を使用しないため、日本産木炭を販売することも少なかった。また、日露戦争前に朝鮮に渡った日本人が増したとともに、日本産木炭の輸入も年々に4-5万俵（約16-20万貫）に増加した<sup>22)</sup>。1908（明治41）年には、對馬を主として、肥後（熊本県）、日向、石見などの地域から日本産木炭を輸入した。これらの輸入した木炭はほとんど堅炭というものであり、その用途は日本に於けるものと異なる<sup>23)</sup>。

## （2）仁川

1908（明治41）年の仁川における木炭状況に関しては、

本品（木炭）ハ主トシテ本邦在留人ノ需要ニ供スルモノニシテ、年々本邦人ノ増加スルト共ニ、其需要モ亦年々増加シツ、アリ。明治三十四年以降當港輸入ノ數量金額左ノ如シ。右ノ大部分ハ日本ヨリノ輸入ニシテ、支那其他ヨリハ極メテ少量ナリ。日本ノ輸出地ハ對州ヲ第一トシ、長崎、鹿兒島、大坂等之ニ次ク、當地方ニ於テ需用セラル、モノ十中八九分迄ハ朝鮮木炭ニシテ、日本産其他ハ僅ニ十中一二分ニ過キス。<sup>24)</sup>

明治34年	126斤	130円
全 35年	789斤	672円
全 36年	15,786斤	—
全 37年	451,918斤	5,169円
全 38年	1,817,902斤	22,298円
全 39年	1,158,681斤	12,587円
明治40年自1月至11月	455,606斤	5,529円

とあり、仁川では木炭を使用するのは主に日本人であった。その需要量は年々当地における日本人の増加とともに上昇しつつあった。仁川が海外から輸入した木炭の中に日本産はその大半を占め、残りの極

21) 静岡県内務部商工課編「海外ニ於ケル木炭ノ状況」『静岡県勸業彙報』（明治41年刊行、第3回）、静岡県内務部商工課、1908年、96-97頁。

22) 1俵は約15kgである。前掲、『丸善単位の辞典』、285頁を参照。

23) 『広辞苑』に「堅炭」について「櫨・櫛などを蒸焼きにし湿灰をかけて火気をとって作った炭。質が堅く火力が強い。荒炭」と解釈されている。前掲、『広辞苑』、2008年、541頁を参照。白炭のことであると考えられる。

24) 前掲、「海外ニ於ケル木炭ノ状況」『静岡県勸業彙報』、94-95頁。



一部は中国産であった。日本産木炭の輸出地として対州（対馬）を第一とし、長崎、鹿児島、大阪などがこれに次いだ。また、当地で使用される木炭の8-9割は朝鮮産木炭であり、1-2割は日本産であった。

### （3）大邱

1908（明治41）年の大邱における木炭状況に関しては、

木炭需要状況（明治四十年十二月調）

韓人間ニ於テハ従来木炭ノ需要ナキモ、三千餘ノ在留本邦人ハ火鉢其他暖室用トシテ、總テ木炭ヲ用ヒツ、アリ。而シテ在留者ノ數日ヲ追テ増加シツ、アレハ、益需要増大スルノ傾向アリ。當地ニ於テ主ニ販賣セラレツ、アルハ京釜線永同ノ産ニシテ、對馬産之ニ次

1月	40,040斤	2月	75,790斤
3月	43,367斤	4月	36,020斤
5月	18,187斤	6月	10,490斤
7月	17,205斤	8月	15,745斤
9月	22,182斤	10月	56,650斤
合計	3,305,676斤		

キ、山口縣ノ生產品モ多少輸入シツ、アリ、即チ本年一月以來鐵道ニ依リテ到着セシ數量左ノ如シ。需要品ノ種類ハ總テ普通品ニシテ別ニ特殊ノモノナシ。用途ハ前項ニ於テ記セシカ如ク火鉢用ヲ主トシ、菓子製造用ニモ多少ノ需要アリ。<sup>25)</sup>

とあるように、大邱における約3千人の在留日本人が火鉢、または採暖のために木炭を使用していた。しかし、当地の日本人の人数が増えれば、木炭への需要量は益々増大する傾向があるとされる。当地で販売された木炭は主に京釜線の永同産のものを主として、日本の対馬がこれに次ぎ、山口県から輸入されたものもあった。また、当地において木炭は主に火鉢に使用され、菓子の製造にも多少用いられていた。

### （4）元山

1908（明治41）年の元山における木炭状況に関しては、

〔一、木炭需要ノ有無〕本品ノ需要ハ主ニ日本人ニ止マルモノニシテ、當地方ノ發展ニ達シ、漸次増進シツ、行クハ明ナル事實ナリ。元來當地方ノ木炭ハ韓人ヨリ供給セシモノニシテ、日本木炭ノ輸入ハ兩三年前迄ハ皆無ナリシモ、近時弗々ナカラ輸入ヲ見ルニ至リタルハ需要高ノ夫レ丈ケ増加セル結果ナリ。〔二、其供給地及輸入高〕別項記スカ如ク、従来本品ハ其大半當地方ヨリ供給シ、需要ヲ充シツ、アリシカ、近來ニ至リ日本産ノ輸入アルニ至リタリト雖、比較的韓國産ノ割安ナルカ爲、自然壓倒セラレ輸入ハ洵ニ微々タルモノニシテ、三十九年ノ如キハ三千五百九十四圓ノ輸入アリシノミ。之ニ反シテ韓國産ハ約十五万貫ノ巨額ニ上ルモノナレトモ、全部陸路ヨリ出廻リ、其大半ハ韓人小賣ニ屬スルヲ以テ、統計ノ材料ナキニ依リ數字ノ上ニ掲クル能ハサルハ遺憾トス。然レ

25) 同上, 94-99頁。

トモ現在當地ノ状態ヨリ推測スルトキハ一ヶ年ノ消費額ハ約十七万貫ヲ下ラサルモノ、如シ。〔三、需要品ノ種類用途依装〕韓國産ハ主ニ雜木又ハ櫟ニシテ、本邦ノ普通堅炭ノ如キモノナシ。又本邦産ハ對州及石州ノモノニシテ、櫟又ハ樅等ノ普通堅炭ナリ。而シテ、其用途ハ鑄造工場、菓子製造場、火鉢炊又ハ炊事場等ニ用フルモノナリ。次ニ依装ニ於テハ兩者共大同小異ニシテ皆茅ヲ以テ依ニ造リ外面ヲ中繩ニテニヶ所ヲ結ヒアルモノナリ、日本産ニシテ約八貫入、韓國産ニシテ約十貫乃至十一貫ニシテ現今價格ハ本邦産一俵一圓四十錢、韓國産一俵一圓五十錢乃至一圓五十五錢ノ小賣相場ナリ。<sup>26)</sup>

とあり、元山では木炭を需要とするのは主に日本人であった。当地の発展とともに、木炭への需要が漸次に増加した。本来2, 3年前に当地への日本産木炭の輸入が完全になく、需要は朝鮮人の供給に満たされていたが、近時輸入が始まり、需要量の増加により輸入量が上昇した。しかし、日本産木炭の輸入があったとはいえ、数量上には従来当地に供給している朝鮮産木炭とは競争できないため、日本産木炭が当地で使用される木炭の中で占める割合が僅少であった。また、朝鮮産木炭は主に雑木、または櫟などの木材で製造されたが、日本産の普通堅炭のようなものがない。当地に輸入された日本産木炭は主に對州（對馬）及び石州（島根県西部）のものであり、櫟、または樅などの木材で製造された普通堅炭であった。日本産木炭は主に鑄造工場、菓子製造場、火鉢炊、または炊事場などに用いられていた。

#### （5）木浦

1908（明治41）年の木浦における木炭状況に関しては、

〔一、木炭需要ノ有無〕本邦在留民ハ炊事及暖爐ニ用ユル外、小數ノ鍛冶職業者ニ於テ少許ノ松木炭ヲ使用シ、韓人ノ需要モ亦松炭ナリ。而シテ其消費高ハ一ヶ年大約五万貫乃至六万貫ナリ。〔一、供給地〕莞島及濟州島附近ノ島嶼ナリ。其産出額ニ付テハ確然タラサルトモ、當港ノ需要ヲ充タシ。尚ホ群山及釜山等ニ輸送ヲ爲スヲ見レハ、優二十万貫以上ヲ超過スヘシ。而シテ前記ノ如ク、供給地モ韓國内地ニシテ、他邦ヨリ輸入スルコト極メテ少ナク、偶々便船ニ依リテ對馬、石見ノ産輸入セラル、コトアリ。〔一、需要ノ種類〕硬軟ノ二種ニシテ、硬炭ハ樅、櫟、檜若ハ雜木、軟炭ハ松木ナリ。<sup>27)</sup>

とあるように、木浦に在住した日本人が炊事及び暖炉の他、鍛冶の作業にも松木炭を使用した。朝鮮人もまだ松炭を用いた<sup>28)</sup>。木浦の木炭供給地は莞島及び濟州島付近の島嶼であった。木浦は海外から木炭をあまり輸入しないが、日本の對馬、石見産木炭の輸入があった。また、木炭の種類としては樅、櫟、檜

26) 前掲、「海外ニ於ケル木炭ノ状況」『静岡県勸業彙報』、97-98頁。

27) 前掲、「海外ニ於ケル木炭ノ状況」『静岡県勸業彙報』、98頁。

28) 『広辞苑』に「松炭」について「松の木を焼いて造った質のやわらかな炭」と解釈されている。前掲、『広辞苑』、2008年、2651頁を参照。

もしくは雑木で製造した硬炭と、松木で製造した軟炭との2種類があった。

## （6）ソウル

1908（明治41）年のソウルにおける木炭状況に関しては、

〔一、木炭需要の有無〕年中日韓人共必需ノ品ニシテ、毎年十月ヨリ翌年四月迄ハ最モ需要期ノ第一ヲ占ム。従来ハ本邦人ノ渡韓僅少ナルヲ以テ、韓國産ノ木炭ノミヲ使用シ來リシモ、此四五年以前ヨリハ邦人ノ増加スルニ從ヒ、韓炭ノミニテハ欠乏ヲ來シ、毎年二万乃至二万五千俵ノ輸入アリシモ、本年ハ地方暴徒ノ爲メ韓炭ニ不足ヲ生シ爲メニ、本年ノ如キハ十一月迄ニ既ニ三万俵以上ノ輸入アリ。供給地ハ重ニ對州、日向、長州ヲ第一トス。〔一、需要品ノ種類〕（カタ炭、俗ニ半白ト稱ス）用途諸官衙及居留民一般ニ使用シ居レリ。<sup>29)</sup>

とあるように、ソウルでは木炭は日本人にとっても、朝鮮人にとっても、年中の必需品であり、とくに毎年の10月から4月までは最も木炭を需要とする時期であった。本来は朝鮮に渡った日本人が少なかったため、在留日本人はほとんど朝鮮産の木炭を使用していたが、4、5年前より在朝鮮日本人の増加とともに、従来生産量が限られていた朝鮮産木炭が日々高まっている需要を満たせなくなったため、日本産木炭が当地に輸入された。これらの木炭の生産地は対州（対馬）、日向（宮崎）、長州（山口県西部）などの地域を主としていた。当地で使用する木炭は「半白」と呼ばれるカタ炭<sup>30)</sup>であった。

## 二、日本統治時代における朝鮮木炭生産の発展

1910（明治43）年の日韓併合により、朝鮮総督府は大韓帝国政府の組織を統合した。朝鮮総督府は朝鮮半島の行政・司法・立法をすべて総覧し、大韓帝国時代に設立した山林局は総督府設置と同時に殖産局の一課となったことで林政推進の速度は速まった<sup>31)</sup>。

さらに、1918（大正7）年から1920（大正9）年まで朝鮮産木炭の日本と中国への輸出量が年々逡増していた。朝鮮産木炭の日本への輸出量は沖縄県、大阪府、香川県などの地域の木炭生産量に匹敵し、中国への輸出量も急増した。この趨勢は朝鮮半島における木炭製造産業が著しく発展を遂げたこと示している<sup>32)</sup>。そこで、本節では日本統治時代における朝鮮の木炭生産の発展を考察してみたい。

『朝鮮彙報』12月号が報告した「釜山港に於ける木炭の集散状況」に、朝鮮産木炭の趨勢について、

従来釜山港に回著したる木炭は大部分は殆んど内地産にして、朝鮮産は甚だ尠く、内地産の當港移

29) 前掲、「海外ニ於ケル木炭ノ状況」『静岡県勸業彙報』、98-99頁。

30) 白炭のことである。

31) 前掲、萩野敏雄2005、58頁。

32) 前掲、『木炭ニ関スル經濟調査』（大正14年刊行『明治後期産業発達史資料』所収、811巻）、2008年、67-68頁。

入額は毎年七八百萬斤を上下し、朝鮮産は六七十萬斤内外の出廻るに過ぎざりしも、歐洲戦亂後各種工業の發展に伴ひ、内地に於ける木炭の需要は俄に激増し、殊に精鍊製鐵事業の勃興に連れ、同方面に於て消費するもの甚だ多く、同時に生産費及運賃暴騰の爲當港相場は次第に騰貴したるを以て、内地産の當港移入は次第に遞減の傾向を呈したるに反し、朝鮮産は内地産の移入減に乘じ、販路を擴張したるを以て、近來益當港出廻を増加するに至れり。即ち内地産の釜山港移入額は大正元年より同三年迄は一箇年平均七百四十四萬斤なりしも、歐洲戦亂後大正四年より同六年迄の移入額は一箇年平均六百三十五萬斤にして、實に百八萬斤を減退したるに係はず、朝鮮産の出廻高は戦争前は一箇年平均六十萬斤なりしも、戦争後は百三十五萬斤にして二倍に増加したり。大正元年後に於ける内地産の移入額左の如し。朝鮮産は數年前にありては、朝鮮人間に於て使用するに止まり、内地人は殆んど之を消費せざりしを以て、一箇年大略六七十萬斤の出廻あるに過ぎざりしも、近來内地産の市價暴騰に伴ひ、内地人間に於て消費するもの俄かに激増したるに由り、大正六年の當港出廻は實に二百六十四萬斤に達し、數年前に比すれば三四倍に増加したり。大正元年後に於ける朝鮮産の出廻額左の如し。<sup>33)</sup>

内地産移入額			朝鮮産出廻額	
年	数量 (斤)	価額 (円)	年	数量 (斤)
大正元年	8,008,300	80,912	大正元年	665,349
同 二年	6,948,500	68,863	同 二年	816,026
同 三年	7,367,900	73,690	同 三年	600,384
同 四年	6,393,400	63,978	同 四年	613,814
同 五年	6,361,100	63,681	同 五年	795,061
同 六年	6,320,100	106,989	同 六年	2,641,287
同 七年 (自一月至八月)	3,677,700	79,895	同 七年 (自一月至八月)	996,795

備考：内地産は大部分は対馬産なれども一部分は石見地方より移入せり。

とあるように、釜山において流通している木炭はほとんど日本産であり、朝鮮産は数が少なかった。釜山に輸入された日本産木炭は約700-800万斤（約112-128万貫）であり、移入された朝鮮産木炭の約60-70万斤（約9.6-11.2万貫）を遙かに超過していた。しかし、第一次世界大戦後の各種工業の發展に伴い、日本における木炭への需要が激増し、しかも精鍊製鐵事業における木炭への需要量も増加し、それと同時に木炭の生産費と運賃暴騰がもたらした釜山港及び同市場の木炭相場の高騰によって、釜山に輸入された日本産木炭の数量は遞減の傾向を示した。これに対して、朝鮮産木炭は日本産木炭の不況に乘じ、販路を擴張し、釜山への移出量が大戦前の一年間の平均60万斤（約9.6万貫）から大戦後の135万斤（約21.6万貫）にとほほ2倍に増加した。また、この数年前に朝鮮産木炭を使用したのはただ朝鮮人に限られていたが、近來日本国内の木炭相場の暴騰に伴い、朝鮮に在留する日本人も朝鮮産木炭を数多く消費していた。これによって、釜山に出回った朝鮮産木炭の数量は1917（大正6）年264万斤（約42万貫）に達し、数年前より約3-4倍に増加したという。釜山の一港における木炭の状況から朝鮮産木炭の増産が

33) 「釜山港に於ける木炭の集散状況」『朝鮮彙報』, 12月号, 朝鮮総督府, 1918年12月, 39頁。

窺える。

また、「釜山港に來集する木炭一箇年大略七、八百萬斤の内九割餘は釜山に於て消費し、一割弱は之を鐵道沿線及沿岸各地に供給せり。而して釜山に於ては官公署、銀行、會社、旅館、料理店等を始め其他一般民家に於て消費し、地方に於ては大部分在留内地人の使用に供せり」と報告されているように、釜山港に集中する木炭は一年間の700-800万斤の内の9割は釜山で消費され、1割弱は鐵道沿線及び沿岸地域に供給された。木炭は釜山に於ては官公署、銀行、會社、旅館、料理店等を始め、他に一般民衆が消費し、地方ではほぼ在留の日本人の使用のために提供された<sup>34)</sup>。他に、同記録には、

現今當港附近に於ては各地共に多くは同地方に産出する朝鮮産を使用するか或は鎮海經由にて對州産を移入するが故に釜山より供給する木炭は是等各地方に於て一時品不足の場合に補充するに過ぎずと雖尚ほ統營、馬山、金海、龜浦、麗水等には毎年一二萬斤乃至六七萬斤を供給せり、其他の地方は販路殆んど一定せず、且之が配給額も甚だ多からざれども大正六年に於ては仁川、群山、鳥致院等に對し一萬斤乃至四萬斤を供給したり是等は全部内地産にして朝鮮産を供給したることなし。<sup>35)</sup>

と報じられているように、当時釜山港附近の各地は主に同地方に産出する木炭か、或は釜山の西部と接する港である鎮海を通して日本の対馬より輸入するものかのどちらかを使用するため、釜山から供給する木炭はただこれらの地方における一時的品不足の場合に補充するものに過ぎなかった。しかし、釜山に集中する木炭は統營、馬山、金海、龜浦、麗水などの地方には毎年1-2万斤ないし6-7万斤を供給するが、他の地方への販路は一定せず、且つ配給額も極めて少なかった。1917（大正6）年には仁川、群山、鳥致院に対しては1万斤乃至4万斤を供給したが、これらは全部日本産木炭であり、朝鮮産を供給したことはなかった。

すなわち、第一次世界大戦後による日本の各種工業の発展に伴い、ことに日本の精鍊製鉄事業の勃興による木炭の消費が甚だ増大し、それと同時に生産費及運賃暴騰などがもたらした木炭価格の高騰は、釜山港の木炭消費が従来日本産木炭の輸入に依存するのを改変し、朝鮮産木炭はこのような状況に於いて多く出回り、大いに伸展した。

朝鮮産木炭の数量に関する統計は少ないが、朝鮮総督府が調査した1920-1922年の輸移出数量と価額とを示せば次のようになる。

---

34) 同上、40頁。

35) 前掲、「釜山港に於ける木炭の集散状況」『朝鮮彙報』、40頁。



表1 1920-1922年朝鮮産木炭輸移出数量並価額

年次 国別	種別	大正9年		大正10年		大正11年	
		数量(貫)	価額(円)	数量(貫)	価額(円)	数量(貫)	価額(円)
支那		174,108	43,435	234,320	47,703	280,216	31,372
露領亜細亜		1,744	434	320	60	128	26
内地		179,088	509	597,872	98,588	1,112,216	181,708
計		314,940	44,378	832,512	146,351	1,392,560	213,106

出典：日本鉄道省運輸局編『木炭ニ関スル経済調査』（大正14年刊行『明治後期産業発達史資料』所収，811巻），龍溪書舎，2008年，68頁から引用。

注：見やすくするために原資料の旧字体を当用漢字，漢数字をアラビア数字とした。

表1に示したように，まず全体的に朝鮮産木炭の輸移出数量と価額とは漸次に増加し，1922（大正11）年には数量が139万貫余に達し，価額は約21万円に至った。それに単に輸移出数量にから見れば，「其ノ増加ノ勢ハ極メテ迅速ニシテ，大正九年ノ三十一萬貫ニ對シ十年ハ約五十二萬貫ヲ増シ，十一年ハ更ニ之ヨリ約五十六萬貫ヲ増加シ，九年ニ比スレバ約百八萬貫即チ約三十五割ノ増産ヲ示セリ」と，朝鮮総督府の調査が報告していると同じように，1920-1922年に朝鮮産木炭の輸移出数量は急速に増加した。朝鮮産木炭は主に日本及び中国に輸出し，露領アジアにも搬出があったが，数量と価額とは少量であり，いずれも毎年逡減し，日本と中国とへの輸出規模には及ばなかった。また，中国への輸出数量は1920（大正9）年には約17万貫であったが，1921（大正10）年になると，約23万貫となり，前年より約6万貫が増加した。1922（大正11）年には，約28万貫に達し，「支那ヘノ輸出量亦急激ナル勢ヲ以テ増加シ，十一年ノ數量二十八萬貫ニシテ，九年ヨリ十一萬貫即チ約六割ヲ増加ス」と，朝鮮総督府の調査が報告しているように，1920（大正9）年より約11万貫，すなわち約6割が増加した。さらに，日本への輸出数量から見れば，1920（大正9）年には僅か約17万貫であったが，1921（大正10）年になって激増し，約59万貫となり，前年より約42万貫が増えた。1922（大正11）年になると，「其ノ仕向地ノ主ナルモノハ内地及支那ニシテ，十一年ニ於ケル内地ヘノ發送數量ハ百十一萬貫即チ沖縄県，大阪府，香川県等ノ生産量ニ匹敵ス」と，その数量は約111万貫に達し，1920（大正9）年より約93万貫が増加した<sup>36)</sup>。朝鮮産木炭の輸出は「是等ノ趨勢ヨリ觀レバ朝鮮木炭ノ生産モ同様著シキ發展ヲナシツヽアルヲ想像スルニ難カラズ」と報告されるように，将来的には木炭の生産と同様に著しく成長し，大きく発展すると評価されている<sup>37)</sup>。

この朝鮮木炭産業の将来性を証明するものとして，朝鮮総督府が朝鮮半島の物産に対して行った調査をまとめた『朝鮮の物産』が挙げられる。それに収録されている1910-1925年朝鮮産木炭輸移出及び輸移入のデータを整理すれば次の表2とグラフ1になる<sup>38)</sup>。

36) 1922年（大正11年）における生産量に関して沖縄県は1,051,923貫，大阪府は1,501,050貫，香川県は936,674貫であった。（『日本木炭史』，全国燃料会館，1960年3月，572頁）

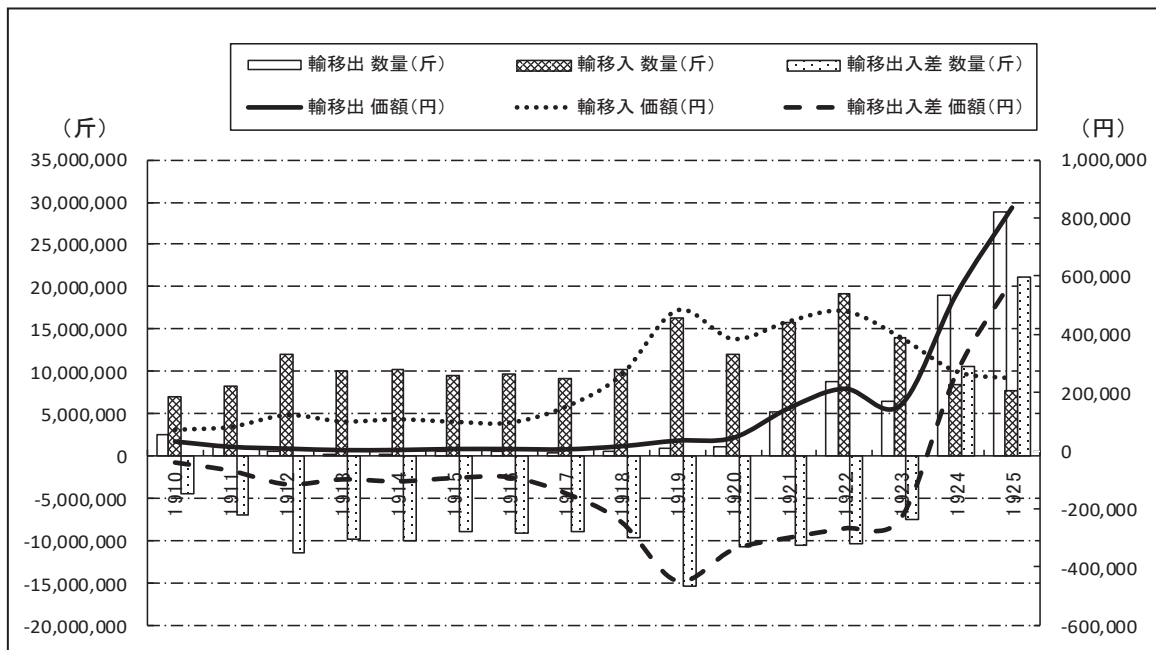
37) 前掲，『木炭ニ関スル経済調査』（大正14年刊行『明治後期産業発達史資料』所収，811巻），2008年，67-68頁。

38) グラフ1では「数量」を棒状，「価額」を線状で表した。

表2 1910-1925年朝鮮産木炭輸移出及輸移入統計

年次	輸移出		輸移入		輸移出入差（）ハ入超	
	数量（斤）	価額（円）	数量（斤）	価額（円）	数量（斤）	価額（円）
1910（明治43）	2,533,600	31,831	7,054,300	72,210	(4,520,700)	(40,379)
1911（明治44）	1,197,500	13,579	8,174,400	82,095	(6,976,900)	(68,516)
1912（大正1）	600,300	7,375	12,072,500	122,356	(11,472,200)	(114,981)
1913（大正2）	189,300	2,374	10,067,700	100,671	(9,878,400)	(98,297)
1914（大正3）	267,400	2,796	10,248,700	107,999	(9,981,300)	(105,203)
1915（大正4）	575,600	6,111	9,442,900	99,739	(8,867,300)	(93,628)
1916（大正5）	499,700	5,928	9,602,300	96,654	(9,102,600)	(90,726)
1917（大正6）	304,000	5,001	9,158,100	150,965	(8,854,100)	(145,964)
1918（大正7）	592,700	15,564	10,259,600	260,495	(9,666,900)	(244,931)
1919（大正8）	952,400	34,952	16,380,700	482,421	(15,428,300)	(447,469)
1920（大正9）	1,119,300	44,378	11,915,100	384,352	(10,795,800)	(339,974)
1921（大正10）	5,203,200	146,351	15,753,600	444,973	(10,550,400)	(298,622)
1922（大正11）	8,753,500	213,106	19,180,400	479,829	(10,426,900)	(266,723)
1923（大正12）	6,549,200	156,456	13,995,400	390,397	(7,446,200)	(233,941)
1924（大正13）	19,005,600	537,176	8,430,100	272,846	10,575,500	264,330
1925（大正14）	28,868,700	835,682	7,712,300	248,489	21,156,400	587,193

グラフ1 1910-1925年朝鮮産木炭輸移出及輸移入推移



出典：表2とグラフ1は『朝鮮の物産』に基づいて作成した（『朝鮮の物産』，調査資料第十九輯，朝鮮総督府，1927年，437，441頁）。

注：表2の原資料の「百斤」を「斤」とした。

表2とグラフ1のとおり，朝鮮総督府が施行した新たな林業政策が始められた1910（明治43）年から日本統治時代における林業の初期開発時代が終結した1925（大正14）年までの朝鮮産木炭輸移出が大

大きく変化したことを示している<sup>39)</sup>。まず、輸移入の場合、数量と価額と両方とも輸移出より圧倒的に大量であり、1910-1916年は変化が少なく横ばいが続いていたが、1917（大正6）年からは漸次に上昇し、1919（大正8）年になっては価額が約48万円、1922（大正11）年には数量が約1,918万斤、それぞれの最高値になり、1922（大正11）年以降になると減少し続けた。一方、輸移出は1910（明治43）年に数量が約253万斤であり、同年輸移入数量705万斤の約三分の一であったが、のちに減量し始め、1917年まで低調であった。しかし、1917（大正6）年にその価額は僅か5,001円であったが、1918（大正7）年になると15,564円に急増し、1919（大正8）年には34,952円に達した。1920-1922年においてはすでに表1にも示したように、1920（大正9）年の約4万円から1922（大正11）年の約21万円と膨張した。さらに、1925（大正14）年になっては価額が約83万円、1922（大正11）年には数量が約2,887万斤となり、いずれも前年より激増し、同年の輸移入より約4倍多かった。総じて、1910-1923年において輸移入は遥かに輸移出を超過し、いわゆる入超であったが、1924（大正13）年になると輸移出は数量的にも、価額的にも大量となり、一気に輸移入を凌いだ。つまり、この現象は、朝鮮産木炭の使用は従来もっぱら朝鮮半島の人々に限られていたことから日本内地、さらに海外に輸出する程度の発展を遂げたことを示しているのではなかろうかと考えられる。

『朝鮮』第139号の「北鮮産の木炭に就て」にも、朝鮮産木炭のこの変化について、

朝鮮産木炭の移出は、大正二、三年頃より行はれてゐた。併し當時に於ける移出額は現今の夫れに比すれば頗る寥々たるもので、貿易上殆んど存在をすら認められなかつた程少額であった。其れが逐年増進し、大正十二年には八萬四千圓、同十三年には四十五萬六千餘圓、更に大正十四年に至りては一舉七十五萬三千圓に躍進して、急激なる増加を示し、現在に於ては相當重要な位置を占むるに至りたるのみならず、生産の増加に伴ひ、將來巨額の移出を豫想せらるゝに至つたのである。<sup>40)</sup>



写真1 朝鮮総督府治下の行政区画図

（萩野敏雄著『朝鮮・満洲・台湾林業発達史論』、『アジア学叢書 143』所収、大空社、2005年から引用）

とあるように、朝鮮産木炭の移出は約1913-1914年から始まったという。その移出額は1923（大正12）年に僅か8.4万円であったが、1924（大正13）年には45.6万円、1925（大正14）年になりさらに75.3万円に激増した。累年に逡増した移出額だけ見ても、朝鮮産木炭は朝鮮半島の貿易上における重要な位置を占めたことがわかる。また、同記録には、

39) 萩野敏雄は日本統治時代における朝鮮半島の林業を、初期開発時代（明治43-大正14年）、本格的開発時代（大正15年-昭和11年）、戦時開発時代（昭和12-20年）などの三つの時代に区分している。（前掲、萩野敏雄2005, 58頁）

40) 板垣二二「北鮮産の木炭に就て」『朝鮮』, 第139号, 朝鮮総督府, 1926年12月, 51頁。

本邦木炭の生産高は、国内消費を充すに足らず、年々多額の外国産品を輸入し、之れが不足を償いつゝある。其の主要輸出先は支那で上海を中心とする浙江省の山地方（主として温州地方）の生産品とし、次は關東州・英領印度地方である。併ながら木炭の輸入高は、大正十三年を最高として漸次遞減の傾向を辿って居る。之は爲替高に依る輸出の不振と、朝鮮木炭の侵出並に支那木炭品質の低下等に基因するものと云ふことが出来る。<sup>41)</sup>

とあり、大正期の日本国内の木炭市場における品不足は海外、とくに中国や朝鮮などの国から木炭の輸入を促した。日本が中国から輸入した木炭は上海を中心とする浙江省の南部産地、主として温州地方の生産品であった<sup>42)</sup>。しかし、1924（大正13）年以降に、日本産品の輸出不振と、中国木炭の品質の低下及び朝鮮産木炭の発展などの原因により、中国木炭の日本輸出は漸次に遞減の傾向を示した。朝鮮産木炭はこれに乗じ、日本国内への輸出が大いに発展することが可能となった。同記録に、

朝鮮對内地の移出關係を見るに、大正十四年の移出總額は實に二十六萬千餘擔、七十五萬三千餘圓にして、比年激増の趨勢に在るが、這是主として價格低廉なるが爲めに近年需要頓に増加し、移出の激増を呈するに至ったものである。（中略）特に内地に於ける生産状態を見るに、耕地面積の擴張に伴ひ森林面積は漸減し、木炭の生産は漸次不利益の立場に陥りつゝあるに加へ、從來の主要産地たる九州、四國、北陸、紀州の地方は餘力最早幾何もなく、唯一の大供給地たる北海道、奥羽地方も餘り期待し難き状態にありて、本邦木炭の將來は危機に瀕するものと云ふべく、之れが解決は實に朝鮮木炭に俟たざるべからざるは贅言を要せざる所である。故に朝鮮木炭の改良増産は唯に鮮内の經濟に重大なる意義を有するのみならず、直ちに本邦燃料問題の解決に關して、樞要なる位置を占むるものと稱することが出来る。<sup>43)</sup>

とあるように、1925（大正14）年に朝鮮産木炭は移出量が約26.1万担（約415.4万貫）であり、移出額が753,000円であった<sup>44)</sup>。これは朝鮮産木炭の價格が低廉であったからである。一方、日本国内では、耕地面積の擴張による森林面積の減少により、木炭の生産は漸次不利益の立場に陥った。従来木炭の主要な生産地であった九州、四国、北陸（新潟県、富山県、石川県、福井県）、紀州（和歌山県と三重県南部）、北海道、奥羽地方（日本の東北地方）などの地域における木炭の生産が飽和状態となり、大きな発展が期待されなかった。日本国内における木炭生産の停滞が、改良と増産が日々進歩している朝鮮産木炭にとっては利益を意味する経済的意義だけではなく、日本国内の燃料不足を緩和する解決策の重要な部分でもあったとされた。

さらに、朝鮮産木炭の中で特色ある一つの種類としては、1925（大正14）年の日本鉄道省運輸局が編

41) 前掲、板垣只二1926、53頁。

42) 温州木炭の日本向け輸出に関しては呉征涛「近代における温州木炭の日本輸出——中国の海關資料を中心に——」が言及している。（『東アジア文化交渉研究』第9号）、関西大学大学院東アジア文化研究科、2016年3月、417-437頁。

43) 前掲、板垣只二1926、54頁と68頁。

44) 旧制の1担は約59.6816kgである。前掲、『丸善単位の辞典』、209頁を参照。



纂した「木炭ニ関スル経済調査」に、

朝鮮ニ於テハ白炭及黒炭ノ外根炭ト稱シ、木ノ根ヲ炭化セシメタル一種ノ木炭ヲ生産ス。此ノ木炭ハ未ダ内地ニ移入セラザルヲ以テ、周知セラズト雖モ、其ノ價格比較的低廉ニシテ、支那炭ヨリ二、三割安く、品質又優良ナルヲ以テ、之ヲ内地ニ移入スルトキハ優ニ支那炭ト競争スルコトヲ得ベシ。<sup>45)</sup>

と記されているように、朝鮮産木炭の中では白炭と黒炭を除いて「根炭」と呼ばれる木の根を炭化させた品種があった。その価格は低廉であり、中国産木炭より2-3割安く且つ品質が優良であった。日本国内に輸入されれば、中国産木炭と競争することができると予測された。

また、朝鮮産木炭の種類についての詳しい記録は1927（大正16）年に朝鮮総督府が編纂した『朝鮮の物産』にも見られるように、朝鮮における木炭の種類は根炭、白炭、黒炭の三種類があった。

まず、根炭とはナラ、またはカシワなどの木の切り株である根株を掘り起こし製炭するものであり、火持ちがよく一般家庭において歓迎され、黄海道及び平安南道などの地方はその産地として有名であった。とくに黄海道の平山、瑞興、金川、鳳山の四郡は最も根炭を生産していた。その製炭業の経営には他人の山林を買収して製造するものと、山主と利益を分配するものとの二種類の生産形態がある。前者は「山代金は通例木炭仲買人より融通を受け、漸次製品を以て償却するを例とする。この方法は仲買人に於ては一方資金を高利に運轉し得るのみならず、製品を確實廉價に仕入れ得るの便あるも、製炭業者は必ずしも有利ではない」と記されているように、山の持ち主と製炭業者との間に仲介人が存在するため、製炭業者にとって製品が良い値段では売れず、不利であった。後者は「山主と利益を分配する焼分けの方法には、製炭業者の所有を二分の一乃至三分の一、場合に依り当事者間に於て契約するもの、如くにして、此の方法は製炭業者の爲めに有利なるも、近時餘り行はれぬ」と、山の持ち主が製炭業者と直接に契約し、製炭業者から一部の利益を獲得し、製炭業者にとっては有利であった。また、根炭の炭窯は石窯であり、山の斜面を掘り下げて築くものである。窯の大きさには原料採掘の関係によって二俵（十貫）窯、三俵（十五貫）窯などがあり、日本式の窯より小さい。「原料の掘採は山地の荒廢を招く虞れあるを以て、近來地方廳にて取締を嚴にし、土地崩壞の虞なき傾斜緩なる個所に於てのみその採掘を許し、跡地は坪三四本の稚樹を残さしむること、して居る」と記録されているように、原料である根株の詰込方法及び木の焼き方は大体日本式の石窯と同じものである。しかし根株の採掘は山地の荒廢を招く恐れがあるため、地方政府より厳しく取締され、その採掘は僅か何箇所かに限定されていた<sup>46)</sup>。

また、白炭と黒炭はナラ、カシワ、その他の雑木を原料として製炭され、江原道地方はその主要産地であった。江原道は従来より森林が豊富であり、木炭の製造に適する資材が多くあり、その製品は江原道内で消費されるのみならず、ソウル、元山、その他の各地に供給していた。しかし、朝鮮半島での従来の製炭方法はなお伝統式であり、近代化が早く進んだ日本の改良した製炭方法より資材の消費が多い

45) 前掲、『木炭ニ関スル経済調査』（大正14年刊行『明治後期産業発達史資料』所収、811巻）、2008年、69頁。

46) 『朝鮮の物産』、調査資料第十九輯、朝鮮総督府、1927年、397-399頁。



ものの、優良な製品が得がたく、生産量は少なかった。このため、江原道において1911（明治44）年の恩賜授産事業として春川郡では製炭傳習所が設けられ、白炭と黒炭の改良製炭の伝習が開始された。この伝習を受けた者たちは「爾來傳習を受けたもの數百名の多きに達し、傳習終了者は道内各方面に發在して製炭改良の實漸く舉らんとして居る」とあるように、江原道における木炭生産の進歩に貢献した。また、製炭傳習所の実験結果によって、「尚ほ製炭傳習所に於て製炭歩合實驗の結果は、白炭一割六分、黒炭二割の成績を擧げるに至った」と、木炭の生産量は以前より白炭が一割六分、黒炭が二割向上したという<sup>47)</sup>。江原道の一箇所から、近代日本が朝鮮半島において行った製炭方法が朝鮮産木炭の生産量の増大を促進したことが窺える。

生産量の増大に関しては1931（昭和6）年の『朝鮮總督府調査月報』の「朝鮮の木炭」に、

朝鮮に於ける木炭の生産量は、大正三年度は僅かに八百餘萬貫にして、約二百萬貫を輸移入して需要を充せるも、十年後の生産量は倍加し、更に昭和四年度に於ける木炭生産額は約二千三百萬貫、價格三百十四萬圓に達し、輸移入量は五十三萬貫に遞減し、輸移出量は六百二十二萬貫に増加せり。<sup>48)</sup>

と記録されるように、朝鮮産木炭の生産量は1914（大正3）年に僅か約800萬貫であったが、1929（昭和4）年には2,300萬貫に激増した。それに、朝鮮産木炭の増産によって朝鮮国内の木炭への需要が自国産で満たせることにより、輸移入量は53萬貫に遞減し、輸移出量（主に対日本）は622萬貫に達した。1929（昭和4）年まで朝鮮産木炭が相当な生産量を持っていた。

1935（昭和10）年の朝鮮總督府商工奨励館が編纂した『朝鮮の物産』には、

木炭は鮮内各地に生産し、最近に於ける其の生産高は約二千百八十七萬六千餘貫、二百二十萬八千餘圓の多きに達し、近時内地木炭商にして、朝鮮木炭の移入を企圖するもの漸く多きを加へ、最近に於ては移出額三千九萬九千餘圓に達せり、今後人口の増加に伴ふ木炭の需要を充當すべき使命を有する朝鮮木炭の生産増加は極めて有望多利なりと謂はざるべからず。<sup>49)</sup>

とあり、1935（昭和10）年に朝鮮總督府商工奨励館が統計した時点で朝鮮産木炭の生産量はすでに約2,188萬貫に達していた。朝鮮産木炭の日本輸出を取り扱う日本の木炭商人の増加により、朝鮮産木炭の移出価額は約3,010万円になっていて、楽観的な予測がされた。

---

47) 同上。

48) 「朝鮮の木炭」『朝鮮總督府調査月報』、朝鮮總督府、1931年5月、81頁。

49) 『朝鮮の物産』、朝鮮總督府商工奨励館、1935年3月、26-27頁。



写真2 朝鮮木炭の製造

(『朝鮮の物産』, 調査資料第十九輯, 朝鮮総督府, 1927年から引用)



写真3 朝鮮の改良窯と製炭器具

(『朝鮮の物産』, 調査資料第十九輯, 朝鮮総督府, 1927年から引用)

しかし、1937(昭和12)年に日本と中国との間に大規模な戦闘が起こり、いわゆる日華事変が発生し、日本はつい戦争の泥沼に陥った。日華事変の長期化、ソ満国境紛争発生等とともに木炭需要(工業用・軍用・ガソリン代用等)が激増した。このような状況において、同年の9月に朝鮮林業開発株式会社は、東洋拓植、王子證券、三菱、三井、住友の出資によって創立された<sup>50)</sup>。さらに、1939(昭和14)年になって木炭不足が深刻化したため、木炭生産が朝鮮林業開発株式会社の重要事業化することになった。同社は昭和13年度に直営製炭事業を開始し、昭和16年度の製炭業は約13万俵の予定であった<sup>51)</sup>。とくに、1941(昭和16)年8月に公刊された「朝鮮林業開発株式会社事業概要」中の「結び」に、「当社設立当時勃発せる支那事変の拡大長期化、第2次欧洲戦乱の勃発更に最近に於ける国際情勢の動向は事変前平時に於ける一般経済状態を基準とし編成せられたる基本計画の遂行に一大衝撃を齎し、事業経営上人的物的資源の蒐集を始め諸種の難障を招来したるに拘らず、万難を排し苦心経営幸にして如上の成績を収むることを得、殊に燃料不足の現状に対処し政府に順応し所謂公益優先の趣旨に則り木炭の増産に進出し燃料国策に若干の貢献をなし得たるは聊欣快とする所である」と記されるように、戦時中は燃料不足に陥り、とくに工業用・軍用・ガソリン代用などの面での燃料不足問題を抱えた日本は木炭生産を重視し、朝鮮産木炭を用い、国内の燃料への需要を満たそうとした<sup>52)</sup>。第2次世界大戦の後期において日本の国策上においても、朝鮮半島の木炭は重要な地位にあったことは明らかである。

グラフ2からも1910-1942年の朝鮮半島におけるこれらの変化による木炭生産量の趨勢が読み取れる。全般的に生産量が急上昇した時期は二期あり、一期は1917-1920年であり、もう一期は1937-1942年である。1917-1920年に生産量が急増した理由は前述したが、第一次世界大戦後による日本内地の各種工業の

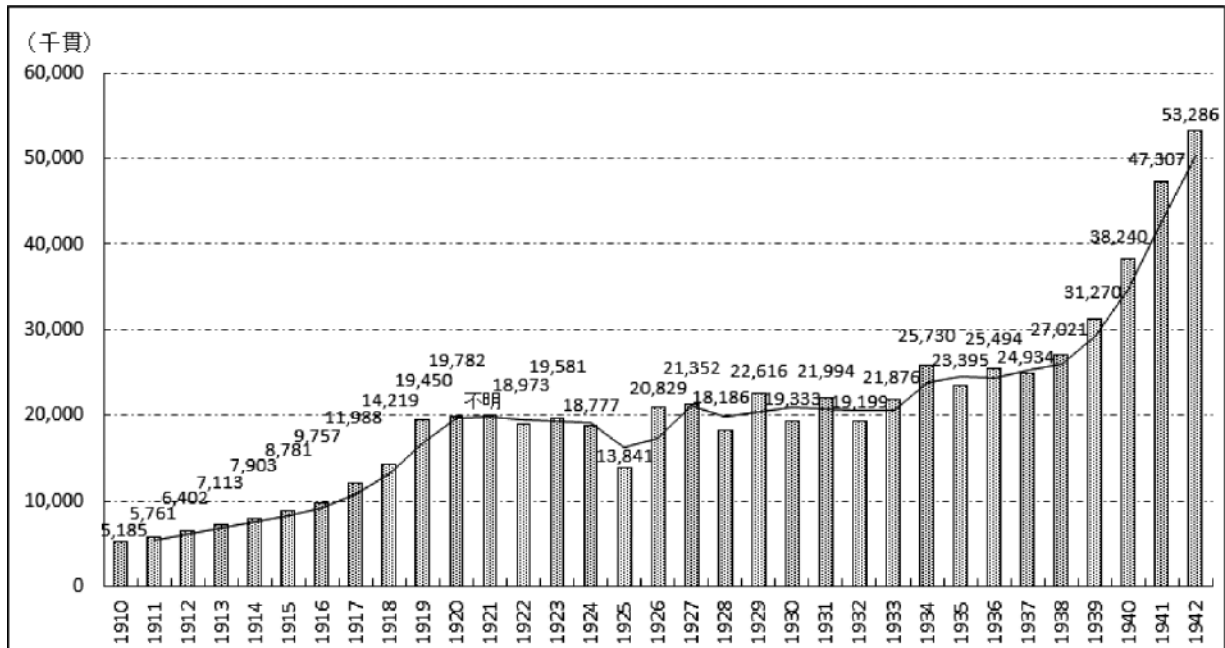
50) 朝鮮林業開発株式会社とは、「昭和十二年九月、東洋拓植、王子證券、三菱、三井、住友の出資により、制令にもとづいて創立した。資本金は二千萬圓である。設立の目的は、朝鮮の農作上もっとも必要な造林を積極的に推進せんとするもので、そのほか製材、林産物の販賣、委託による林野の販賣、その他の事業を行ふ」という会社である。(企画院研究会編『国策会社の本質と機能』, 同盟通信社, 1944年, 52頁)

51) 前掲, 萩野敏雄2005, 123頁を参照。

52) 「朝鮮林業開発株式会社事業概要」の「結び」は『朝鮮・満洲・台湾林業発達史論』から引用。(前掲, 萩野敏雄2005, 123頁)

発展，とくに精錬製鉄事業の勃興に伴い，木炭に対する需要が急増し，朝鮮産木炭の生産に拍車をかけたためと考えられる。そして1937-1942年における生産量の拡大は既述のように，日華事変が発生して以来の一連の情勢急変による木炭需要の激増に由来すると思われる。戦争の泥沼化とそれによる燃料不足を解消する重要な代用品である木炭に対する需要は木炭生産を加速させたのである。

グラフ 2 1910-1942年朝鮮半島木炭生産量



出典：グラフ 2 は三宅正久著『朝鮮半島の林野荒廃の原因—自然環境保全と森林の歴史—』，農林出版株式会社，1976年，154頁に基づいて作成した。

注：1921年の生産量は不明であるが，全体の趨勢によって2千万貫前後と仮定した。

### おわりに

近代，朝鮮半島の人々は一般に木炭を使用する習慣がなく，朝鮮半島で木炭を使用したのは主に同地に在留する日本人であった。これらの朝鮮に在住する日本人が同地で生産された木炭だけではなく，日本から輸入したものをも使用していた。

一方，大正期に海外に輸出された日本産木炭の生産地は主に日本本土を中心とした地域であっただけでなく，当時日本が支配していた朝鮮，樺太，台湾などの地域でも木炭の生産が行われ，そのうちとくに朝鮮産木炭の生産は迅速な発展を遂げた。

1904（明治37）年の『通商彙纂』に見られる，朝鮮の重要港口である釜山，仁川，元山，木浦，ソウルなどの地方の木炭事情に関する記録によれば，釜山と仁川とは日本の石見（島根県西部），豊後（大分県中南部），対馬，日向（宮崎県），また中国地方などの地域から木炭を輸入していた。しかし，当時の朝鮮半島の人々は日本人より木炭を利用することが少なかったが，「根炭」と呼ばれた固有の木炭があり，当時の日本産よりは劣ったものの，朝鮮半島において従来木炭を製造し，使用していたことを示し

ている。とくに元山、木浦、ソウルでは日本産木炭の輸入が行われず、使用する木炭はほとんど付近の地域で生産された朝鮮産木炭であった。しかし、いずれの地域でも木炭を消費するのが主に当地に在住する日本人であった。これは、朝鮮人は一般に日本人のように採暖に火鉢を使用することがなく、炊事に日本人より木炭を使用することが少なく、喉の渴きをいやすのに湯を飲む習慣が無いなどの三つの点からであるとされる。また、1908（明治41）年の『静岡県勤業彙報』の報告から、釜山、仁川では依然として、元山、木浦、ソウルなどの従来も日本産木炭が搬入しなかった地域も日本産木炭を輸入し始めた。とくに、ソウルでは木炭は日本人にとっても、朝鮮人にとっても、一年にわたる必需品となり、日本の影響で、朝鮮人の中で木炭を使用する人が増加した。

さらに、1918（大正7）年から1920（大正9）年まで朝鮮産木炭の日本と中国への輸出量が年々通増していた。朝鮮産木炭の日本への輸出量は沖縄県、大阪府、香川県などの地域の木炭生産量に匹敵し、中国への輸出量も急増した。また、1920（大正9）年から1922（大正11）年にかけて朝鮮産木炭は輸移出数量が大幅に伸張した。1922（大正11）年から1935（昭和10）年にかけて朝鮮産木炭の生産は一層発展し、とくに1924（大正13）年に輸移出は数量的にも、価額的にも増大し、一気に輸移入を超過し、日本内地、さらに海外に輸出するほどの発展を遂げた。1937（昭和12）年になって日本の戦時体制により急速に生産が強化されたが、木炭不足が深刻化する中、朝鮮林業開発株式会社が設立され、朝鮮産木炭で日本国内の木炭供給不足を緩和させるという方針が実施された。

以上のように、近代朝鮮半島では木炭が従来からあまり使用されない燃料であったが、1918（大正7）年以降、朝鮮半島における木炭生産事業の発展、または日本国内における木炭への需要の増大により、朝鮮産木炭の生産量が膨張し、日本に輸出されることとなり、近代朝鮮半島におけるエネルギー生産構造の重要な一部分となった。とくに戦時中の日本にとって朝鮮産木炭は自国の燃料不足を補完する重要な物資であったといえよう。